



国指定史跡

大友氏遺跡

令和7年度版

最新の調査成果と発掘調査のながれ



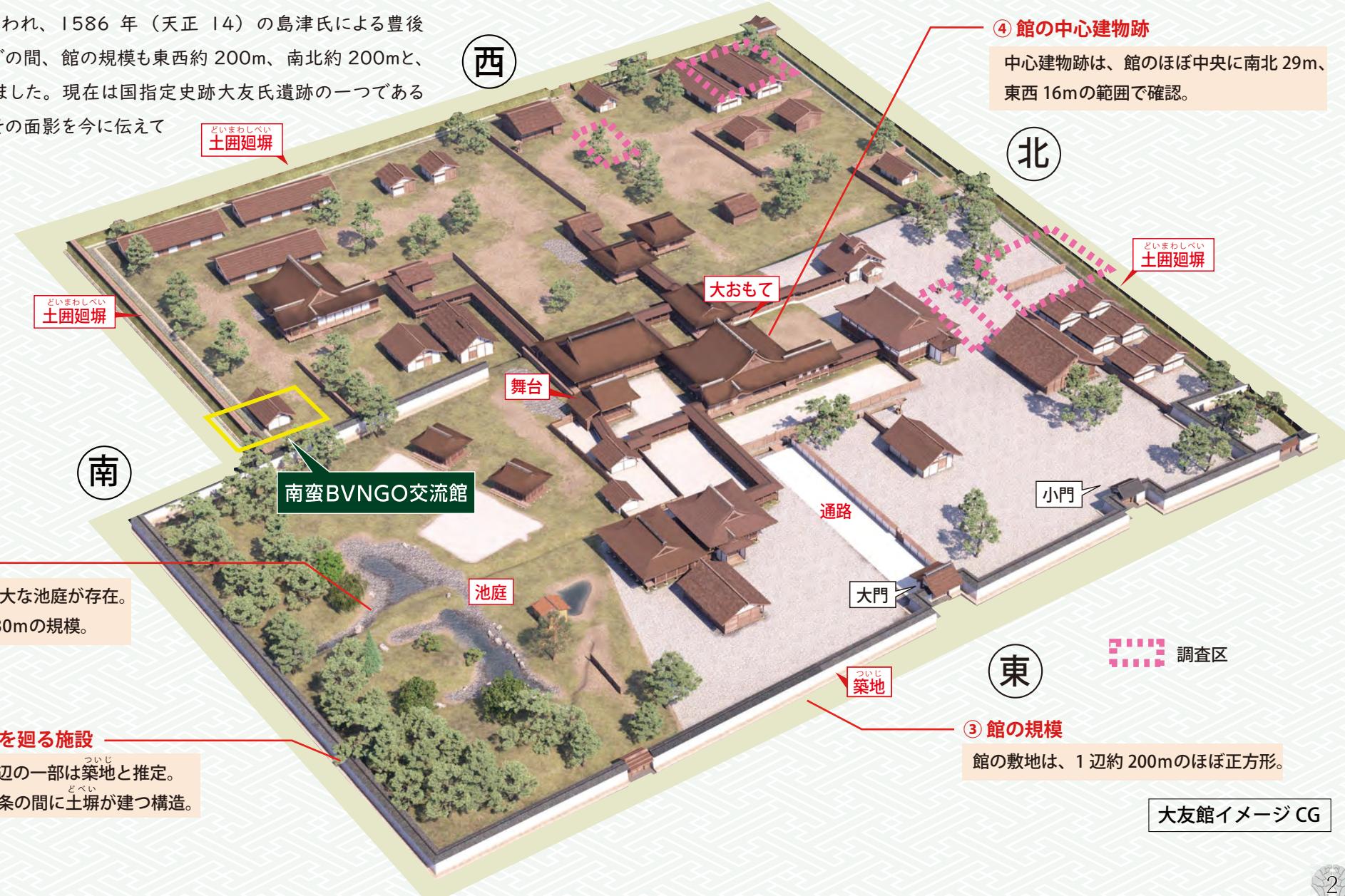
大分市教育委員会

戦国時代の居館として屈指の規模を誇る「大友館」

大友館は、大友氏歴代の当主が領国を治めるための拠点として整備された館です。1573年（天正元）頃、宗麟から息子の義統への家督相続を契機として大改修が行われ、1586年（天正14）の島津氏による豊後侵攻により廃絶するまでの間、館の規模も東西約200m、南北約200mと、広大な敷地をもっていました。現在は国指定史跡大友氏遺跡の一つである「大友氏館跡」としてその面影を今に伝えていきます。

⑤ 館跡からの出土品

儀式・儀礼で使用された多量のかわらけや、全国でも出土量の少ない高級陶磁器である中国元時代の梅瓶片や、青磁の器台片（夜字型器台）が出土。



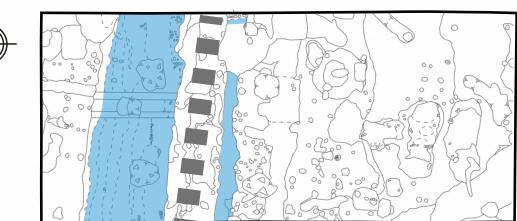
大友館イメージCG

16世紀後半[宗麟(義鎮)～義統期]の大友館【北東エリア】

大友館は、16世紀後半の大友宗麟と息子義統の頃に敷地が一辺約200m四方の最大規模となります。大友館の周囲は、幅約4m、深さ約1.8mの大溝（外溝）と、内側に幅約2.3m深さ約1.6mの溝（内溝）が二重に巡る外郭施設が確認されました。また、外郭の内側では大量のかわらけが廃棄された遺構を確認しました。

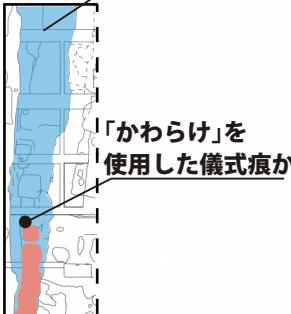


大友館空中写真(西から)



第50次調査

下層の溝

「かわらけ」を
使用した儀式痕か

凡例

溝跡

廃棄遺構

積土(土囲廻塀)

0

20m

土囲廻塀
推定ライン

第51次調査

大友氏館跡50・51次調査区遺構図

①外溝・内溝(土囲廻塀)

大友館の北・西・南の屋敷境にあたる調査地点では、館を囲むように並行する2本の溝跡と、2本の溝跡に挟まれた幅約4～4.5mの空間に粘土と砂を交互に積み上げた積土が確認されています。

北外郭の調査では、溝を2～3回にわたり掘り返している状況を確認することができました。また、溝底は西から東に向けて深くなっていることから、水を東側に流す意図があったと考えられます。

文献史料には、大友館の外郭施設を表す言葉として「土囲廻塀」の記載が登場します。これは、元亀3年(1572)～天正元年(1573)頃に出された大友宗麟と義統が豊後国内の諸郷荘宛てに「土囲廻塀」の建設を命じた文書であり、義統の家督相続に伴い「土囲廻塀」の整備を行ったことが分かります。

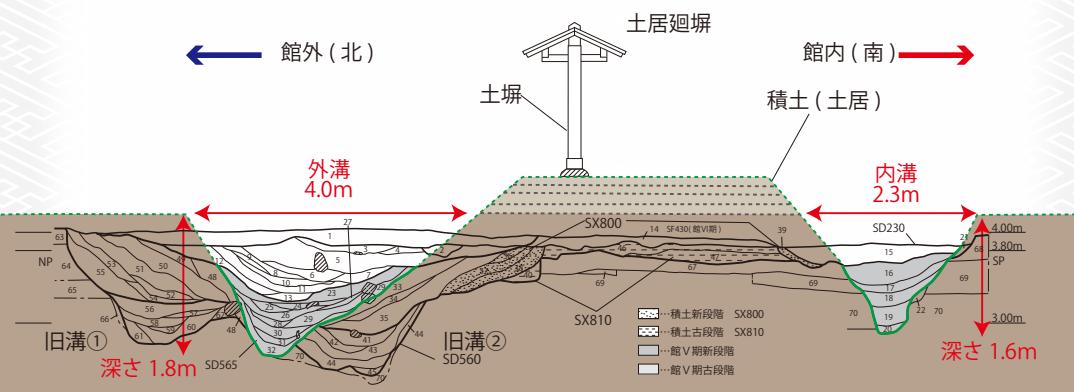
「土囲廻塀」の言葉から、土居の上に土塙が構築された構造がイメージされます。



外溝の状況

出典：大友館研究会 2022『戦国大名大友家の年中行事と館』

八木直樹 2021『戦国大名大友氏の権力構造』



16世紀後半の大友館北外郭イメージ

②「かわらけ」廃棄遺構

大友氏館跡の発掘調査では、素焼きの器である「かわらけ」が大量に出土します。

今回の調査では、京都系「かわらけ」と呼ばれる、京都で使用されていた「かわらけ」
を真似た手づくりの「かわらけ」が大量に確認されました。『当家年中作法日記』

によると、大友館では、「大表節」や「簾中方節」
※とうけねんちゅうさほうにしき

といつた、様々な宴会や儀式が行われていたこと
が分かっています。これらのかわらけは、館内で

行われた宴会や儀式・儀礼で使用されたものと
考えられます。



「かわらけ」

「かわらけ」を使用した儀式痕か

②の「かわらけ」廃棄遺構の下部で
発見された溝の底に貼った粘土の中
からは、「かわらけ」と燭台を封入して
いる状況が確認され
ました。これは、溝を
構築する際の何らか
の儀式に伴うものと
考えられます。



「燭台」(ろうそくを立てる台)



儀式痕とみられる「かわらけ」出土状況

夥しい数の「かわらけ」

館の外郭施設内側では、完形の「か
わらけ」が大量に廃棄された遺構を複
数確認しました。いずれの遺構も大友
宗麟・義統の時代にあたる 16 世紀後
半頃のものと考えられます。



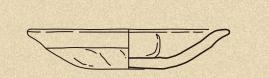
大量に廃棄された「かわらけ」

※『当家年中作法日記』とは

第 22 代当主大友義統が大友家で行われた儀式や年中行事
をまとめ書き残した史料です。戦国大名家で行われていた
武家儀礼や年中行事を 1 年間通して具体的に伝える史料は
全国的に見ても類例がなく、極めて貴重です。



出土した遺物も個別に
実測・トレースをして
報告書に掲載します。



「かわらけ」を横から見た図面
を描きます。

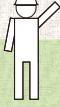
(右は断面、左は側面)



図面と合わせて写真を撮影します。

発掘調査のながれ

調査開始！！



1 表土の除去



土の色などを見極めています★

平らにけるのは結構ムズカシイ

2 遺構の検出



機械で掘り下げを行ったのち、手作業で丁寧に地面をけずって遺構を探します。



◆使用する道具

最初は、土層を確認しながら遺跡がある深さまで重機で掘ることからはじまります。



ショベルカー

◆使用する道具

5 遺物の発見



光と影を見極めて～
パシャリ！

6 写真の撮影



掘り終わった遺構や土器がでている状態で、きれいに掃除をして、各種カメラで撮影を行います。



◆使用する道具

土器は丁寧に取り上げ、ラベルに必要事項を記入し、袋に入れて持ち帰ります。



「どこから出土したか」それが
重要です。

◆使用する道具

発掘作業は、土に埋もれた昔の人の暮らしの跡を調べるもので、遺構を探し、掘り下げ、写真や図面で記録していく作業を行います。



3 遺構の確認



遺構がみつかったら、遺構の範囲に釘などを使って線を引いてしるしをつけます。



◆使用する道具

7 遺構の実測



掘り終わった遺構や出土した遺物は、どのような状態でどこから出てきたのかを図面に記録します。



◆使用する道具

4 遺構の掘削



遺物は貴重な
たがかりになるので、慎重
に掘り進めないと…

線を引いた遺構の内と外の土のようすを見分けながら、掘り下げます。この時、土器などの遺物が土の中から出てきます。



◆使用する道具

8 空からの撮影



最近では
ドローンが
大活躍!!

最後に発掘調査地の清掃を行ったあと、空からヘリコプターなどで調査地を撮影し、遺跡の記録をとります。



◆使用する道具

整理作業のながれ

整理作業開始!



1 水洗い

遺物の状態を見極めて
やさしくブラッシング



遺物についた土や泥を、ブラシを使って洗い落とします。その時、壊れたりしないように気をつけます。水洗い後、遺物を乾かします。



◆使用する道具

5 実測

まずはじっくり観察しよう



三角定規・マーコ・キャリパー・ディバイダーなどを使って、遺物を正確に計測し、図面を作成します。



◆使用する道具

2 ナンバリング

まさに職人技!?



見つかった場所がわかるように、遺跡名・遺物番号を遺物に小さく書きこむ作業を行います。



◆使用する道具

6 トレース

土器の特徴をくみ取りながら、
ていねいになぞっていきます



製図用のペンやパソコン用の図面作成のソフトを使って、図面をきれいに仕上げます。



◆使用する道具

3 接合

仲間が見つかってよかったです★



ナンバリングが終わった後、遺物の破片どうしを接着剤で接合し、復元していきます。



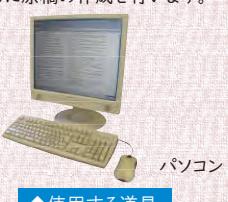
◆使用する道具

7 報告書の作成

遺構・遺物の解説や調査の概要などを文書にまとめます



遺物の整理・分析が終わると、調査報告書としてまとめるために原稿の作成を行います。



◆使用する道具

4 復元

石膏部分に色をつけて本物のように復元することもあります



接合しても遺物の破片がみつからなかったところは、石膏などの補修材をすきまに埋めて、遺物の復元を行います。



◆使用する道具

8 報告書の刊行



調査報告書ができるあがった後は、主な図書館などに配布され、郷土の歴史学習や地域研究などに広く活用されます。遺物も収納され、展示の公開や地域の歴史を紐解く資料として活用されます。



図書収蔵状況

出土品収蔵状況

大友氏遺跡出土品

土師器

大友氏館跡の出土品の大半を占める。
儀式・儀礼等で使用されたと考えられる。



土師器 (皿 C)



土師器 (坏 A)



土師器 (坏 B)



土師器 (耳皿)



犬形土製品 「安産のお守り」などの意味があったと考えられる。

木製品



漆器椀

国産陶器

交易により各地域からもたらされた焼物。



国産陶器 (備前産・瀬戸美濃産)

茶道具



備前播鉢



石臼



金属製品



小札

外国産陶磁器

大友館の座敷飾りとして使用されたと考えられる高級陶磁器など、
府内の町からも外国産の陶磁器が多数出土している。



青花梅瓶

中国の元の時代に作られた壺の
破片で、当時の日本では高級品。



青磁 夜学型器台



青磁 夜学型器台



鶴形水注



華南三彩鶴形水注



青磁

白磁



青花

青花五彩碗

タイ産

ベトナム産

朝鮮産

ミャンマー産



ベトナム産陶器長胴壺



朝鮮陶器碗



ミャンマー産陶器壺



砂糖や硝石を運ぶ容器として
使用されたと考えられる。